

# PCスキルおよび情報活用の実践力と プライバシー志向性との関連性

河野賢一\*1・和田裕一\*1  
Email: kono@cog.is.tohoku.ac.jp

\*1: 東北大学大学院情報科学研究科

◎Key Words プライバシー志向性, 情報活用の実践力, 情報教育

## 1. はじめに

昨今、大規模な個人情報漏えい事故や個人情報保護法改正、社会保障・税番号制度（マイナンバー制度）、ビッグデータの活用など、個人情報やプライバシーの取り扱いについて考えさせられる機会は多い。それゆえ、個人情報やプライバシーに対する関心はこれまでに高まっていると考えられる。

パーソナルコンピュータ（以下、PC）やインターネットを使う機会が多い人はある程度のPCスキルを備えているだけでなく、個人情報やプライバシーを意識する場面に遭遇する機会も多いであろうことから、これらの情報の取り扱いに関しては特に関心が高く、それゆえ個人の特性としてのプライバシー志向性（プライバシーを確保したいという欲求）も高いであろうことが考えられる。また、「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」と定義される、いわゆる「情報活用の実践力」<sup>(1)</sup>が高い人は情報を取り扱う技能に長けているだけでなく、情報そのものに対する意識も高いと考えられることから個人情報やプライバシーといった情報についても意識や関心が高く、それゆえこのような人においても前述と同様にプライバシー志向性が高いことが考えられる。このように、「PCスキル」「情報活用の実践力」「プライバシー志向性」の間には相互に何らかの関連性があることが予想される。

そこで本研究では、上述の3要素、すなわち、「PCスキル」「情報活用の実践力」「プライバシー志向性」の間にはどのような関連性が存在するのかを探ることを目的とした調査を行った。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者および調査手続き

インターネット調査会社のモニターの中から国内在住の15歳以上のPCユーザーを対象としてクローズド型ウェブ調査を行った。具体的には、国内に住む15歳以上のPCユーザーに対し、調査への協力依頼、および調査ページのURLを記載したメールを配信し、回答を求めた。以上の手続きに従い、最終的に回答に不備の無かった15歳～79歳までの男女900名（男性516名、女性384名、平均年齢40.91歳、SD=17.17）を対象に分析を行った。

### 2.2 調査材料

#### フェイスシート

調査対象者の年齢や性別に加え、PCの利用年数などを確認した。評定は、調査者が設定した各選択肢からあてはまる項目を選んでもらうものだった。たとえば、利用年数では、「①：半年未満」から「⑤：3年以上」のいずれかから、利用頻度では、「①：ほぼ毎日」から「⑤：めったに使わない」のうちいずれかから適当な答えを選択するというものであった。

#### PC操作スキル尺度（以下、PCスキル）

Potosky & Bobkoによる"Computer Understanding and Experience Scale"<sup>(2)</sup>や、落合・石渡・彭・和田によって作成された"PC操作スキル尺度"<sup>(3)</sup>を参考にし、昨今の情報環境におけるPC操作スキルを測定する目的で独自に作成した尺度であり、得点が高いほどPC操作スキルやPCに関連する知識が高いことを意味する。具体的には、「ソフトをインストールできる」や「OS（オペレーティングシステム）がどのようなものか知っている」といった項目への回答が求められた。項目数は、37項目であった。評定は、「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」までの5件法であった。

#### 情報活用の実践力尺度<sup>(4)</sup>（以下、情報活用の実践力）

情報教育によって育成される能力の一つである「情報活用の実践力」を網羅的に測定するための尺度であり、「収集力」「判断力」「表現力」「処理力」「創造力」「発信・伝達力」の6つの下位尺度から構成されている。項目数は54項目であり、「収集力」「創造力」「発信・伝達力」がそれぞれ10項目、「判断力」「表現力」「処理力」がそれぞれ8項目となっている。評定は、「1：全くあてはまらない」から「7：非常にあてはまる」までの7件法であった。

#### プライバシー志向性尺度<sup>(5)</sup>（以下、プライバシー志向性）

日本人のプライバシー志向性（プライバシーを確保したいという欲求）を包括的に測定するための尺度であり、「独居」「自由意思」「友人との親密性」「遠慮期待」「家族との親密性」「閑居」「隔離」の7つの下位尺度から構成されている。項目数は21項目であり、各下位尺度はそれぞれ3項目から構成されている。評定は、「1：全くあてはまらない」から「7：非常にあてはまる」までの7件法であった。

## 3. 結果

### 3.1 調査対象者のPC利用状況

今回の調査対象者のPC利用状況についてフェイス

シートから得られた情報を基に簡単にまとめる。「PCの利用年数」で最も多かった回答は「3年以上」(815人, 90.6%), 「PCの利用頻度」で最も多かった回答は「ほぼ毎日」(769人, 85.4%)であった。また、「PCの一日あたりの使用時間」では「2時間以上」(487人, 54.1%)と回答した人が最も多く、「1時間～2時間未満」(222人, 24.7%)がそれに続いた。

### 3.2 尺度得点の基本統計量と尺度間相関

本研究で使用した各尺度の平均得点、標準偏差および内的整合性 (Cronbach の  $\alpha$  係数) をまとめたものを表 1 に示す。各尺度の得点における性差を確認するために  $t$  検定を用いて検討したところ、PC スキルにおいてのみ性差が認められ、男性の平均得点は女性の平均得点に比べて高いことが示された。また、各尺度の  $\alpha$  係数は.84 から.97 の範囲に分布しており、十分な値が得られたことから内的整合性が確認された。

表1 各尺度の基本統計量

	男性 (n=516)		女性 (n=384)		t 値	Cronbach's $\alpha$	Cohen's $d$
	平均	標準偏差	平均	標準偏差			
PCスキル	149.17	30.64	132.45	30.65	8.10***	.97	0.55
プライバシー志向性	94.11	14.77	93.26	14.74	0.86	.84	0.06
情報活用の実践力	237.25	34.05	233.09	30.68	1.89	.94	0.13

\*\*\* $p < .001$

次に、尺度得点間の積率相関係数を算出したところ、「情報活用の実践力」と「PC スキル」の間に弱い正の相関が認められた(表2)。しかしながら、「プライバシー志向性」と「PC スキル」および「情報活用の実践力」の間にはどちらともほとんど相関が認められなかった。

表2 尺度間の相関

	PCスキル	プライバシー志向性
プライバシー志向性	.16**	—
情報活用の実践力	.31**	.03

\*\* $p < .01$

## 4. 考察

フェイスシートでは調査対象者のPC利用年数や、PCの利用頻度、PCの一日あたりの使用時間等について回答を求め、彼らのPC利用状況を確認した。回答結果から、調査対象の多くは3年以上PCを利用しており、半数以上がほぼ毎日比較的長時間(2時間以上)PCを利用している様子がうかがえる。昨今では学校や職場などでもPCを使用する機会が多いことから、このような場所での利用形態も含めた上で一日あたりのPC使用時間等を合算すれば今回のような結果が得られたとしても不思議ではない。

また、本研究で使用した各尺度の平均得点を算出し、

各尺度の得点において性差が存在するかどうか  $t$  検定を用いて検討したところ、PCスキルにおいてのみ有意な差が認められた。PCへの態度における性差の存在はこれまで数多く報告されており<sup>(60)</sup>、そうした性差の多くは「男性は女性よりもコンピュータに対してポジティブな態度を持っている」というものだが、今回のPCスキルの得点差は、先行研究で指摘されているような性差を要因としたPCに対する態度の違いに少なからず起因するのではないだろうか。

さらに、本研究で使用した尺度得点間の積率相関係数を算出したところ、「情報活用の実践力」と「PCスキル」の間に弱い正の相関が認められたものの、「プライバシー志向性」と「PCスキル」および「情報活用の実践力」の間にはどちらともほとんど相関が認められなかった。この結果は、PCスキルが高いと思われる人であってもSNS等で不用意に個人情報をさらしてしまうことがあるように、高いPCスキルや情報活用の実践力を有し、個人情報やプライバシーに対する関心も高いと思われる人であっても必ずしもプライバシー志向性が高いとは限らないということを示唆していると考えられる。

## 5. おわりに

本研究では、15歳～79歳の男女を対象にインターネットリサーチを実施し、「PCスキル」「情報活用の実践力」「プライバシー志向性」の関連性について調査を行った。その結果、PCスキルには性差が存在する可能性や、高いPCスキルや情報活用の実践力を有する人であっても必ずしもプライバシー志向性が高いとは限らない可能性などが示唆された。なお、本研究はインターネットリサーチを用いて行われたものであり、得られた知見の一般性については今後も追試・検討していく必要がある。

## 参考文献

- (1) 文部省：“情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 第1次報告”(1997)。
- (2) Potosky, D. & Bobko, P. : "The computer understanding and experience scale: a self-report measure of computer experience", *Computers in Human Behavior*, 14, pp.337-348(1998)。
- (3) 落合純, 石渡陽子, 彭志春, 和田裕一：“現代版パーソナルコンピュータ態度尺度作成の試み”, *CIEC 研究会論文誌*, 2, pp.25-32 (2011)。
- (4) 高比良美詠子, 坂元章, 森津太子, 坂元桂, 足立これか, 鈴木佳苗, 勝谷紀子, 小林久美子, 木村文香, 波多野和彦, 坂元昂：“情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討”, *日本教育工学雑誌*, 24, 4, pp.247-256 (2001)。
- (5) 吉田圭吾, 溝上慎一：“プライバシー志向性尺度(本邦版)に関する検討”, *心理学研究*, 67, pp.50-55 (1996)。
- (6) Loyd, B. H. & Gressard, C. P. : "Gender and computer experience as factors in the computer attitudes of middle school students", *Journal of Early Adolescence*, 7, pp.13-19(1987)。
- (7) Shashaani, L. : "Gender-based differences in attitudes toward computers", *Computers & Education*, 20, 2, pp.169-181(1993)。